

在日ベトナム人労働者への心理支援の検討

Psychological Support for Vietnamese Workers in Japan

高 史行

TAKA Fumiyuki

立命館大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program in Human Science, Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University

Key words: Multi-cultural Counseling, Mental Health, Integrative Psychotherapy

目的

出入国在留管理庁（2023）によると、令和4年末の在留外国人数は307万5千人を超え過去最高を更新した。ベトナムが49万人に迫り第2位であり、前年度からの増加数は1位である。少子化と労働力不足から日本の外国人労働者の受け入れの傾向は今後も続くと考えられ、在日外国人労働者のメンタルヘルス支援は、多文化共生社会の日本社会において喫緊の課題であるといえる。本研究は、在日ベトナム人労働者の異文化体験の様相を研究し、彼らへの心理支援を検討し多文化共生社会の日本の一助となることを目的とするものである。立命館大学倫理委員会の承認済（衣笠一人-2022-103）

方法

本研究は半構造化面接による個別インタビューとした。研究参加者は人材管理会社でベトナム人労働者の管理を行うベトナム人女性正社員3名である。分析方法はKJ法（川喜田1986）とTrajectory Equifinality Model (TEM)（サトウ2009）の質的研究法を用いた。KJ法は研究者の仮説に沿うデータの恣意的選択を防ぐ（やまだ2007）という。KJ法により図解化と叙述化を行いTEMにより時間過程による脈絡性を加味し多様性の可視化を試みた。

結果

各人3回の面接結果をKJ法ではA型図解とB型叙述化し、TEMではTEM図とTLMG図を作成した。これまでの外国人移住に関する文献の多くは異文化適応を扱いストレスなど否定的な結果を訴えたものが多数であるが、本研究では自己実現や生きがい、人間的な成長等の語りが多く得られた。母国にいたときは親に従順な生活だったが日本に来て自分で判断する生活へと変わり独立心や親としての子どもに対する責任、日本に来てから将来どんな人間になりたいか考えるようになったなど価値観（信念）の変化を語る者がいる一方で、母国同様の大家族の環境を維持している者は母国と変わらないと語った。また全員が頼りになる人の存在を挙げたことから支えになる人材は必須であろう。困ったときの心理職利用については、本研究協力者3名からは症状が重かったり問題が大きかったりと自分だけで解決が困難な場合は利用を検討するという意見の他に、必要性を否定する

者もいた。Schirmer et al (2004)は、ベトナムでは精神疾患を持つ家族員を表ざたにはせず、家族内に収め病状が重篤になるまで専門家の援助を受けないと述べており、本研究結果との共通点が見られた。

考察

結果を受け心理職の支援を不要とする者に支援を勧める他に支援方法はないか考察した。本研究で筆者が新たに着目したのが環境要因である。その一例が家族の顔を見ながらコミュニケーションを可能にした3G以降のスマートフォンの普及である。スマートフォンが果たす役割は大きくスマホで顔が見えなければホームシックに絶対なるとさえ語る者もいた。Hack-Polay (2012)は、母国の家族や友人と定期的に連絡を取っていた者は、しない者と比較して故郷を恋しいと感じることが少なかったという。今やスマートフォンは、単なる通信機器ではなく海外に住む外国人の心理安定に寄与するレジリエンス要因 (Masten 2014)であると筆者は考える。多言語心理師、通訳、心理療法等の技術、支援情報の周知徹底等に加えて直接関係ない環境要因に着目すること、また多文化を考慮した研究法と臨床への応用へと今後はつなげたい。

参考文献

- Hack-Polay, D. (2012) *When Home Isn't Home – A Study of Homesickness and Coping Strategies among Migrant Workers and Expatriates*. International Journal of Psychological Studies, 4(3) 62-72.
- 川喜田二郎 (1986) KJ 法—渾沌をして語らしめる. 中央公論社.
- Masten, A.S. (2014) *Ordinary Magic: Resilience in Development*. Guilford Press. 上山眞知子 J・F・モリス (訳) (2020) 発達とレジリエンス—暮らしに宿る魔法の力. 明石書店.
- サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究. 誠信書房.
- 出入国在留管理庁 (2023) 報道発表資料 (2024年10月2日取得<https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html>)
- やまだようこ (編) (2007) 質的心理学の方法 語りをきく. 新曜社.